



Title	<図書紹介>川村善之著『日本民具の造形』
Author(s)	渡邊, 真
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 98-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

川村善之著

『日本民具の造形』

淡交社 2004

渡邊 真／京都市立芸術大学

本書は、川村先生が美術鑑賞教育の研究のために各地の美術館や博物館を歴訪した成果をまとめたものの一つで、前著『日本民家の造形』の姉妹編ともいるべき書である。全国各地を訪ね歩き、自ら撮影した民具の中から、890館1,500点が採録されている。その他、全国の民俗博物館・資料館一覧や五十音順の索引がつけられており、何処にいけば見ることが出来るのか、わかりやすい案内ともなっている。

全体は7章構成になっているが、中心は第5章で「用途から」分類されており、1. 衣生活、2. 食生活、3. 住生活、4. 運搬・旅、5. 社会生活、6. 人生行事・年中行事、7. 信仰生活、8. 生業・生産という細目をさらに細かく区分して、民具の写真図版と解説文がレイアウトされている。

本書の視点はあくまで造形に置かれており、民具を体系的・組織的に分類・表示しているというより、網羅的ではあっても、図版の選択は、著者の造形的関心が選択基準になっていると推測できる。巻頭の論文も「民具の造形を見る」と題され、そこには「……民具の造形も美術の造形も、造形の本質は同じであるという考え方」が反映していると著者自身が語っている。そのためもあってか、民具についての規定はおおらかで、

民具も、原初的な自給自足生活の中での手作り民具から、専門職人の手になる改良された民具へ、また手の道具から手動の小機械への変化などはあったが民具造形の本質は変わらない。(p. 14)

という捉え方であって、今日の「大量生産の

諸器具」や「現代機械で量産される器具類」とは別のものとされている。伝統的な素材と技術に基づくものと、化学合成物質など新素材や新たな製造技術に基づくものを区別することに納得できる面はあるが、今日私たちが生活の中で日々使用している器具たちを民具と捉えられないのか、民具と今日のデザイン製品との断絶性と連続性をどのように考えるべきかについては、問題は残る。

しかし本書の特徴は、著者自身が捉えた民具の造形性が、図版写真を通して素直に伝わる点である。第1章「素材・技法から」では、木、竹、藁、樹皮、石、ガラス、金属、皮革、紙などを使用した典型的で、造形的にも興味深いものを例示し、技法については、焼きもの、塗りもの、染もの、織りもの、編もの、結び、型づくり、という項目立てになっている。

第2章「機能から」では、叩く、切る、削る、突く、挟むなど18の人間の動作、行為に注目して、それを助ける道具を並べている。第3章「装飾性」では、器物の表面の装飾と人や生活を飾る道具を取り上げ、第4章「形体の類型から」では、多角形、平面体、曲面体など人為的に作られた形体と自然形態という観点から民具の造形に注目している。これらの分類のあり方は、民具の体系的分類というよりは、民具の造形を見る視点の違いを表している。

本書にあるのは、全国の民俗博物館や資料館を訪ね歩かれ、

このような、ただ用途に素直な、素材の特色を生かした単純素朴な民具のよさは、

使ってなお一層よくわかるのであるが、たとえ使ったことがなくても、みてそのよさを感じ取ることも、できる人はできる、というのが所謂美術でいう「視覚性」である。(p. 16)

という視覚性の眼で捉えられた民具の数々である。この眼に共鳴してみると、これが本書の楽しみ方ではないだろうか。

最後に、著者は、多くの民具が全国で蒐集、保全、管理されていることに驚くとともに、それに努力した人々に感謝の念を表明しつつも、しかし、現状における管理運営の不十分さ、民俗博物館や資料館への参観者の少なさに危惧の念を感じているという。各地に博物館や資料館が多いのは、どこか箱物行政の結果を思い出させる。作って集めて、ただ見せるだけ。どう生かすのか。他方で本格的にデザイン・ミュージアムが作られる様子はあまりなく、現代の大衆の生活との関係は断絶のままである。何か工夫の必要を感じさせる問題である。